

# 昭和村で即興演奏会

## ロシアの「アストレイヤ」



昭和村でコンサートを行ったグバイドウリーナさん(右から2人目)ら4人

### 地元 お神楽愛好会も腕披露

# 神秘的な音で魅了

ロシアの現代音楽の世界  
開かれた。同村のお神楽愛  
的な作曲家ソフィア・グバ  
イドウリーナさんら4人が  
つくる即興演奏グループ  
「アストレイヤ」のコンサ  
ートが十五日夜、昭和村で  
能した。

同村噴丸地区の廃校とな  
った小学校の校舎で予定さ  
れていた演奏会は、雨のた  
め会場を同村下中津川の公  
民館付属の音楽ホールに変  
更。約三百人の村民に東京  
から来た約五十人の音楽フ  
アンも加わって、小さなホ  
ールはいっぱいになった。  
コンサートは午後五時す  
ぎに開演。前半の部で、イ  
ンドやネパールなど世界各  
地で民俗音楽の修業を積ん  
だ新潟県新潟市の即興演  
奏家、和川英夫さんらが  
木琴に似たアフリカの民俗  
楽器や、鉄わんをたたく独  
創楽器の美しい音色で聴き  
手を魅了した。

次いで同村内の五十嵐近  
士さんらお神楽愛好会の  
六人が、三味線や太鼓、笛  
に合わせた日本古来の獅子  
舞やこっけいなひょっここ  
踊りを披露。顔なじみの村  
民の爆笑を誘い、喝さいを  
受けた。

午後八時すぎに始まった  
後半の部で「アストレイヤ」  
のメンバー三人とロシアの  
打楽器奏者、マルク・ペカ  
ルスキーさんが登場。四人  
は舞台上に並べられた琴や  
鐘、三味線に似たロシアの  
民俗楽器など、十種類以上  
の弦・打楽器を駆使して即  
興演奏など四曲を演奏。ド  
ラの連打の高音響やシンバ  
ルの端を盛楽器の「で弾く  
音色など、無数の音が交錯  
する神秘的な音楽に聴衆は  
拍手を惜しまなかった。

演奏後、グバイドウリー  
ナさんは「自然豊かな昭和  
村では東京公演以上の靈感  
がわいた。聴き手の村民た  
ちの反応も素晴らしい」と  
満ち足りた表情。お神楽に  
ついて「日本のリズムと  
私のアジア的な部分が響き  
合った」と絶賛した。  
一方、あまり聞き慣れな  
い現代音楽に接した村民た  
ちも「音がきれい」「不思  
議な気分になった、楽しかっ  
た」と興奮し、同村でペン  
ションを営む小林政一さん  
「(中略)「感性に訴える素晴らしい演奏」と感激した様  
子。また東京から来た女性  
客(中略)はお神楽に初めて接  
し「あんなに楽しいとは知  
らなかった」。

演奏会を主催した噴丸文  
化再学習センターの藤森弘  
実行委員長は「異質なもの  
同士がぶつかり合う素晴らしいコンサートが出来た。  
この村で今後も面白い企画  
を続けていきたい」と成功  
の喜びを語った。



1993(木)5.22

魚眼 複眼 ニュース '93

大沼郡昭和村で十五日、現代音楽の世界的な作曲家フィア・グバイドゥーリナ率いる即興演奏グループ「アストレイヤ」のコンサートが開かれた。これに接し、今まで数多く見た、聴いた各地の「文化的な他し物」にはない新鮮さを感じた。この演奏会の魅力を引き取り、地域が取り組むさまざまな文化事業、さらには地域の文化そのものを豊かに裏支える道を考えてみたい。

文化の衝突

(井上 英介)

会津若松市から南西へ約四十キロの山深い村。公民館の小さな音楽ホールは村の人たちでいっぱいだった。文字通り野良猫で腰に手ぬぐいのお巾着も、背中に赤ん坊、両手で小学生を引き連れた主婦も舞台をじっと見つめている。

その舞台では、世界中で絶大な評価を受けているヨーロッパの作曲家たちが、さまざまなお打楽器を駆使して神秘的な音の世界を造形している。

この違和感。前日と前々日、東京の大手ホールで正統の音楽ファンを前に演奏していた彼らと、現代音楽と出会う機会が多くなっている村の人たち。この公演の魅力の中心は、しかしそんな奇妙な取り合わせにあるのではない。

魚眼 複眼 ニュース '93

からないけど不思議な感、藤森弘さん(左)は企画原図を語った。

グバイドゥーリナの音楽はすでに一定の評価を確立し、クラシック音楽の専門家の間では「権威付け」の作業がほぼ終わっている。だから、彼らの公演だけでは

現代音楽と同じ舞台上

引き継ぐと取り組んできた。同村周辺地区の五十歳近士さん(右)ら六人だ。

お神楽の価値、再評価

引き継ぐと取り組んできた。同村周辺地区の五十歳近士さん(右)ら六人だ。そのままの感覚でアストレイヤを体験した。余計な知識が邪魔しない分、体験はより印象的ではなかった。

「異質なものを衝突させたかった」と公演後、公演実行委員長で村内の小学校を利用した「噴丸文化再学習センター」の常駐スタッフ、

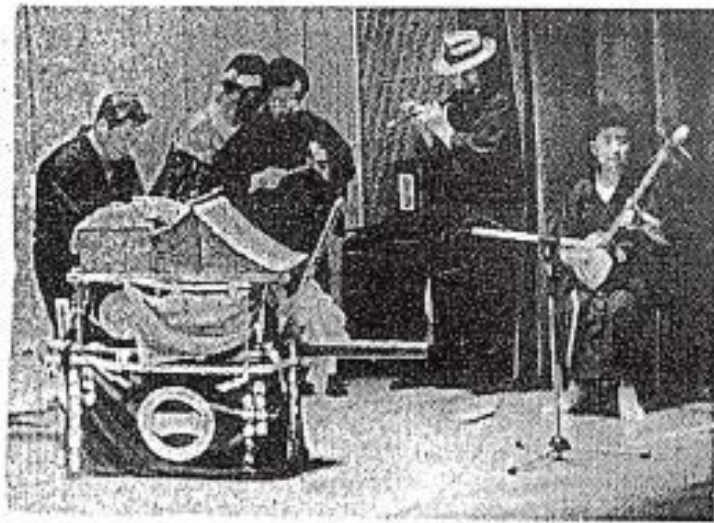
「異質なものを衝突させたかった」と公演後、公演実行委員長で村内の小学校を利用した「噴丸文化再学習センター」の常駐スタッフ、

今回の公演には、確かに意図もあつた。藤森さんは東京のある知識人に共鳴して村に移住した外部の人が関た。今回の公演を村自身が企画したわけではない。

やり方を頼れば「神楽のインテリのお遊び」として村から遊離し兼ねない。だが幸いにも「たくらみ」は的中した。

異文化との出会いには強

烈なインパクトが伴う。しかも思われてならない。しかし、その刺激が文化自身を壊していき、終わった後の村の人たちの目の輝きと興隆した口ぶりは、普賢問われたお神楽が全く異質な音楽にぶつかったこと、自分たちがはぐくみ、自分たちをばぐくんできたお神楽という文化が持つ価値を、可確認できた表情のように、



お神楽は村の人たちの拍手を浴びた